



東西南北～  
文化情報・観光情報

# ヤングアメリカンズジャパンツアー 2013夏 つくばスペシャル

取材：平成25年6月28日、30日  
NPO法人じぶん未来クラブ  
代表 佐野 一郎氏  
理事 林 貴美子氏



ショーの様子（写真提供：NPO 法人じぶん未来クラブ）



筑波総研株式会社  
主任研究員 國安陽子

ヤングアメリカンズという団体をご存じだろうか。3日間で子どもたちを変えてしまう圧倒的な表現教育プログラムをひっさげて、つくばで初めてのワークショップが開かれた。

## ・°☆∴\*° ヤングアメリカンズの設立 °∴☆°

ヤングアメリカンズ（以下、YAとする。）は、1962年、高校の音楽教師ミルトン・C・アンダーソン氏によってアメリカはカリフォルニア州に設立された。現在は音楽公演と教育が活動の二本柱で、世界中からオーディションで選ばれた音楽と子どもたちを心底愛する17～25歳のキャスト約300人で構成されている。

設立当時のアメリカは、ベトナム戦争反対を唱えて髭や髪を伸ばしたヒッピー族の若者に大人が嫌悪感を示し、若者と大人がお互いに理解し合えないジェネレーションギャップが社会問題となっていた。アンダーソン氏は自身が接する若者たちは皆知的で心優しく、メディアがバッシングするような若者ではないと感じ、若者たちのありのままの素晴らしい姿を、音楽を通じて世に伝えたいとYAを設立した。

1990年代には教育関係の予算が削られ、学校の音楽や美術の授業が減らされた。YAは音楽の授業を取り戻し、若者たちの音楽の才能を开花させるために、学校への出張授業（アウトリーチ）を始めた。子どもたちが自分に自信を持ち、元気になり、学校自体も活性化する効果があるとして、アウトリーチはまたたく間に広がり、現在、アメリカ国内では45州に拡大し、年に2回のツアーが実施さ

れている。イギリスツアーは年1回、ドイツを中心としたヨーロッパツアーは年2回。近年では、ロシア、中国、南アフリカ等にも広がっている。

## ・°☆∴\*° 日本での開催 °∴☆°

2006年に、現在YAの日本ツアーをプロデュースしているNPO法人じぶん未来クラブ代表の佐野一郎氏が、社会に出る前の若者の人材育成やキャリアアップを目的とした事業を行う団体を設立するために活動していたときに、YAの存在を知人に紹介された。佐野氏は実際にアメリカにYAを見に行き、すっかり魅了され、その3カ月後にYAのツアーを日本に招いた。これが、YAが日本でツアーを始めるきっかけである。

日本でのワークショップは、開催地域のボランティアを中心に、地域のホールを借りて参加費を募る運営方法が主体であるが、規模は年々拡大し、現在は春、夏の年2回開催され、初来日から7年間でワークショップは248回開催され、参加者は4万人以上である。また、2011年秋から、東日本大震災で大きな被害を受けた東北3県（福島・宮城・岩手）の主に公立の小中学校に出向いてワークショップを行っている。3年目の今年、文部科学省はじめ多くの企業や個人からの助成や寄付で成り立つツアーと、アメリカ大使館TOMODACHIイニシアチブが主催するツアーの2つが開催され、年間4ツアー、11カ月開催される。

## ・°☆∴\*° つくば市での開催 °∴☆°

2013年6月28日～30日、YA日本ツアーの特別プログラム「ヤングアメリカンズつくばスペシャル」がつくば市で初めて、筑波大学の学生会館講堂で開催された。文部科学省在任時、YAに魅了された新津勝二氏が筑波大学に赴任したことが

きっかけとなり、筑波大学の教職員、大学生ボランティア、地域ボランティアと年齢も立場も違う人たちが一体となって協力し合うという他の地域にはないユニークな体制で実施された。筑波銀行はエリアスポンサーとして、2012年5月につくば市北条地区で竜巻被害を受けた子どもたちをワークショップに招待する等の協力・支援を行った。



ショーの様子（写真提供：NPO 法人じぶん未来クラブ）

子どもの変化を目の当たりにして受ける感動ははかりしれず、次回のワークショップにも参加させたい。子どもも、もう一度参加したがり、家族でYAに魅了され、口コミでYAが広がっていく。地域によっては、ワークショップの参加者は募集開始直後にいっぱいになってしまうほどである。

#### ・°☆:~\*°ワークショップの効果°~\*~☆°

YAのワークショップは、①コミュニケーションは言葉だけではないことに気付かせ、②もっと伝えたい、もっと分かり合いたいという気持ちを抱かせ、③集中力と連帯感と自信を芽生えさせ、④これまでの自分の殻を破るきっかけを与える効果がある。効果は性別・年齢・国籍に関係なく現れるが、じぶん未来クラブでは子どもたちのワークショップを優先し、平日の日程を埋めるために企業の研修等大人に向けたワークショップを展開していく考えである。

すでに開催した地域からは継続開催の要望、訪問していない地域からは開催の要望があり、東北3県へのツアーも2013年秋、2014年秋の開催が決定しているため、いかに調整して、様々な地域で開催するか嬉しい悩みとなっている。より多くの日本の子供たちがYAに接することができるように今後も検討を続けていくそうだ。

来年、YAがまたつくばにやってくる。その時は、ぜひ、子どもたちのあふれる笑顔と自信をあなた自身の目で確かめてください！

スポンサーを示す看板

参加者は、筑波大学近隣の小学生150人、中高生50人、筑波大生40人と幅広い年齢層である。父兄に伺ったところ、参加のきっかけは友人や家族からの口コミが多い。

ワークショップは、YAのキャスト約40人から指導を受け、3日間で20曲以上の歌とダンスを習得し、3日目の夜に1時間のショーを披露する。キャストは日本ツアーに来るために、YA内のオーディションに勝ち抜いてきた。児童心理学者によると、YAの指導方法は「褒める」、「励ます」、「可能性を引き出す」という3つのHで行われている。キャストたちは常に子どもたちの目を見て、参加者ひとりひとりに合わせて対応している。レッスンの輪に入っていない子どもには一対一で接し、ノリノリの子どもたちにはさらに積極的に動くよう仕向けていた。

参加者はキャストと英語で会話するが、日本語のできるキャストや日本人のキャストがいるため日本語も飛び交っていた。何度も聞こえてきたのが、「ジブンニハクシュ！」。自分に拍手。できたね！自分を褒めて！と、子どもたちに伝え続けている。ワークショップの休み時間や帰り道で、子どもたちも「ジブンニハクシュ！」と言っているのが印象的だった。歌とダンスのレッスンを受けただけで人生が変わるなんて驚きだという参加者の言葉があった。「自分に拍手」した子どもは、それからずっと、自分を褒めて、自らの可能性を引き出していく力を持ち続けられるのだろう。

子どもを参加させた父兄が、自身の



レッスンの様子